うつ蟬

三

3

△空蝉　并ノ一　以哥為名箒木ノ竪ノ并也

一并ノ了河海抄ニウツホ物語廿二巻ニ第三ノ并春日祭第五ノ并吹上ノ巻祭ノ使菊宴十ト有又入千松物語ニモ并一帖有唐日本ノ了ヲ同時ニ并テ書ル也是ハ横ノ并也

一凡并ノ本意者横ノ并タルヘシ并ハ比也廣韻云并ハ合也比ハ十ソフウノ心合ハ并ヲ合テ書ノ々又詩賦序ニ并序ト書ルヲ菅家ノ説ニハ序ヲ合ルト云々并ノ字合トヨメリ又称名院殿御説ニモ比ト云字ニ并ノ心叶ト云々

一花鳥云并ノ儀先以横為本ウツホ濱松ホノ物語ノ如シ但此物語ニカギリテ竪ノ并アリタトヘハ一巻ニ可昏ヲホシワカチテ両巻ニ十七ルカ如シ又一巻ノ中ニ横竪ヲ兼タルモアリ末ツム花ノ巻ハ初ハ若紫同時ノ了ヲ昏テ末ニ若紫ヨリ後ノ了ヲ昏リ若紫ノ横竪ノ并也

△紹巴ノ抄　花鳥スクニ云テユカシ了十ヒ横ヘ入スシテ不叶故成ヘシ与風箒木ニ空セミノ了云出シタル間行末ヲヨクノシラセンガタメナリ玉カツラノ巻ニハ別ノ人入ノ了ヲ多カケリト云々

一細流云横竪ノ了河海花鳥ニ見タリ此巻ハ箒木ノ巻ノツヽキ也タテノ并可成

△惣而并ノ了史記ノ本記ノ外列傳ヲタテタルニ同シカルヘシ

△師説曰竪ノ并トハ同時ノ了ヲ合テ両巻ニ十ミタル了也前ノ巻ヨリ順ニ昏了也此巻ハ箒木ノ竪ノ并也同時ノ了ヲ両巻ニ十ミタル十リ何レノ巻ヒニテノモ同シツヽキノ了ヲワカテルヲ是竪ノ并ト云々又横ノ并トハ前ノ巻ヨリモ初ノ了ヲ書ノセタル了也タトヘハ蓬生ノ巻ハ末ツムノ巻ヨリ前ノ了ヲヨモキフニカケリ此故ニ横竪ト云也又末ツム花ニモ横竪ノ并也若紫ニ源氏十七ノ三月ヨリ冬マテノ了有末ツム花ニハ十七ノ二月ノ了ヨリ次ノ年ノ春マテノ了アリ若紫ヨリ一ケ月前ノ了ヨリ昏リ是横ノ也末ツムハ又若紫ヨリ後ノ了ヲ昏是タテナリ仍末ツム花ハヨコタテノ并也玉カツラノ并ハ行幸マテ皆竪ノ并也年モ月モ次第ニ昏リ玉カツラハ源氏君二十五ノ三月ヨリ十二月マテ初音ハ三十六正月小蝶ハ三十六ノ三月ヨリ夏マテノ了アリ五日ノ了レ常夏ハ卅六ノ六月篝火ハ卅六ノ初秋ノ了野分ハ卅六ノ八月行幸ハ卅六ノ冬ヨリ明年ノ二月マテノ了アリ如此順々ニ昏了皆タテノ并ナリ紅梅竹河ハヨコタテ也　△一部ノ并是ニテ可知了カ

一并ノ了諸抄考残タル了アリ并ノ本意日本紀一書ノ説ノヤアリ同時別説アリ又外ノ説本説ヨリ後ノ了モアリ是竪横ノ證據也并ノ儀天地ニモ理氣横竪アリ人ニ經絡アリ日本紀卅巻天地人ノ三ツ神代上下ハ天地日月人皇卅八巻ハ卅八宿天地ノ理横竪アラスト云了ナシ是ヲ并ノ濫觴トス此説先達未曽有之平豊紹ノ説也

子ラレ玉ハヌ　箒木ニテ徒説ト源氏ノ御中川ノ宿ノ夜ノ了レ我ハカク人ニテ好色ノ了ニテノ人ニキラハレタル了ハナキニコヨイ空セミニキラハレテ世ヲウシト思ナト小君ヲ

手サグリ　小君ヲ源ノ手ニテサグリテ空ニ似タルトし

ねられ給はぬまゝには我はかく人にくまれても
ならはぬをこよひなむはしめてうしと世を思ひ
しりぬれははつかしうてなからふましくこそ思ひ
なりぬれなとの給へは涙をさへこほしてふせり
いとらうたしとおほす手さくりのほそくちいさき
ほとかみのいとなかゝらさりしけはひのさまかよひ
たるも思ひなしにやあはれなりあなかちに
かゝつらひたとりよらむも人わろかるへくまめ
やかにめさましとおほしあかしつゝ例のやうに
ものたまひまつはさす夜ふかう出給へはこの
子はいといとおしくさう〳〵しと思ふ女もなみ〳〵

源氏心空蝉を思ふ也

人のおもてもちまて小君を例のやうにまつはし

女は源氏をとかくいひて不嫁前にて

ならすかたはらいたしとおもふに御せうそこも
たえてなしおほしこりにけると思ふにもやかて
つれなくてやみ給ひなましかはうからましゝひて
いとおしき御ふるまひのたえさらむもうたてある
へしよきほとにかくてとちめてんとおもふものから
たゝならすなかめかちなり君は心つきなしとは
おほしなからかくてはえやむましう御心に
かゝり人わろくおもほしわひて小君にいと
つらうもうれたうもおほゆるにしひて思ひかへせと
心にしもしたかはすくるしきをさりぬへき
をりみてたいめんすへくたはかれとのたまひ

下紐
夕やみハ道たと〳〵し
月待てかへれ我せこ
そのまにもみん
古今六帖の引歌也

わたれはわつらはしけれとかゝるかたにても
のたまひまつはすはうれしうおほえけりおさなき
心ちにいかならむおりとまちわたるに
きのかみ國にくたりなとして女とちのとやかなる
ゆふやみのみちたと〳〵しけなるまきれにわか車
にて井てたてまつるこのこもおさなきをいかならむと
おほせとさのみもえおほしのとむましけれは
さりけなきすかたにて門なとさゝぬさきにといそき
おはす人みぬかたよりひき入ておろしたて
まつるわらはなれはとのゐ人なともことにみいれ
ついせうせす心やすしひんかしのつまとに

博物志云堯造囲碁又云舜造之
晋中興書云囲碁ハ堯舜以教愚子し

そへまいらせて我ハみなみのすみのまよりかうし
したゝきのゝしりていりぬ御たちあらはなりと（後達とも小君の入る格子のかうし明たるをあらはなりと云也）
いふなり（人の見入んと云なり）なぞかうあつきにこのかうしハおろされ
たるととへばひるより西の御かたのわたらせ給て（後達の詞）（昼より西の御方とハ伊予介妹軒端の萩の事 空蝉の事也）
碁うたせ給ふといふさてむかひゐたらんを見ゑ（源氏の心）
りやと思ひてやをらあゆみいでゝすだれのはさまに（小君入る妻戸のかうしをさながらさし間の簾の）
入給ぬこのいりつるかうしハまださゝねばひま（なぶるやうにさし入て源氏の見給ふ也）
みゆるによりて西ざまに見とをし給へば（小君の入るハ辰巳なれハ西さまに見給ふ也）
このきはにたてたる屏風もはしのかたおしたゝまれた（空蝉と軒端の萩との間さこ 清濁両説）
るにまぎるべき木丁なども（几帳をかけたるハ紛るゝ也）あつければにや
うちかけていとよく見いれらる火ちかうともし（うちかけて清濁両説）（碁故の火也 前遊びと本見八碁打故也）
たりもやのなかはしら（もやハ本家也 おもやとも云 寝殿作りにて一間ゝゝに柱を立る也）にそばめる人や我心かくる（空セミ）
とまづめとゞめ給へばこきあやのひとへかさねなめり（紅濃 紫とも 小袿着たるにて上着にアラフリ）
なにゝかあらむうへにきてかしら
つきほそやかにちいさき人のものげなきすがた（ひい）
ぞしたるかほなどハさしむかひたらん人などにも（まめやかなる）
わざとみゆまじうもてなしたりてつきやせ／＼
にていたうひきかくしためり（軒端ノ萩の事也 是ヨリ見て書也）いまひとりハひん
がしむきにてのこるところなくみゆしろきうす（軒端の萩のあり）
ものゝひとへかさね（昼の方よりみるなり）ふたあゐのこうちきだつ
ものないがしろにきなして（上紅下青ソ二藍ヤヨトヨム也 赤花と青き花にて染 下青上赤深き也 細ニハ下赤上青とも云し）くれなゐのこしひき
ゆへるきはまでむねあらはにばうぞくなるもてなし（とりつくろはず乱りきてゐる）（袴のこし）（胸打あけ不作法也）（ひきやうなる躰なる）（傍側）

コキアヤノ単カサネナンメリ何ニカアランノ上ニキテノ　花鳥云女房の衣裳夏四月ヨリヨリハ一重カサネヲキルヽヒトヘニツヲヒキリカサネタルモノヽ此何ハサフニヒトヘシキズコキトハ紫深ク染タルヘシ河海ニ紅ノ色コキトシルサレタリ イカヽトそ侍トテ、但上ニキテト有ハ小ウチキノコトヤ小サキハカラキヌヲキサル寸モ代々上ニキルヤし又云単カサネナンメリト説ヒタル詞ニテノ心ハ単重ネ何ニテ物アランと云詞ニや然レハ一ツキタル了成上ニキタルハヒカヘカサネカ

手つき引かくしてあるうけし碁ヲ心入之ルハちつひめきと衣そも扨そんういはくろうとし

下場　行海岩之出る霜雪の降つ木の先さわつるがはなかりちと云し尤文字よむへし

けちさん　囲之結　碁のだめさすし

心とげ　利し云え　皆わたのせ狄のるゝし

（夜元皆形湯の萩乃招きし源氏の心）

いもせ渡うれしくまつぶくとこえて下浦の（鈍ノ下浦）
なる人のし庭つきひさいつきりのあさ座の入
まことちはおいれるおいあやうづぶらふ座のな屈
うらちなわかえすゆとふさやうまそおまくいあう
さとさのわがうさのおやといせきまけますへていと
ちきたる所なくおりしきなる人とえしうわざく（け人の親女よかくし）
しうおやの世ふなくハおすふ庭のめとれうしくみ
路んちう格志倖のなる人をさんりやせふとえゆ御
うせなきうりハ御のしごうちえてくけちさは（一かど有ハシトし）
わさわあう孫とげよええてきえくとさうどけバ（心の利根）（きハくしう碁を打ちてする早ノ字こちやき也し）
おくのひとえいはと志倖うふ乃ゆるめえまちかへや

八花集ニ古今トテ生セリ　伊与の湯乃ゆげたの数ハた八ツ岩は九ツ中ハ十六ちまで三十三有とし　雑歳ノ湯坪ニイヨエノユケタハイソイつさけシラズカゾヘズヤ／＼君ゾシルラム一　ノ説ニ湯ケタノ数ハ五百三十九有ト云リ　伊与ノ青島ト云所ヨリ出ル湯七ツマ七十七有し　伊行説ニ伊与ノ竹カムスメト云縁アル詞也トミ　紀湯カ坪ヲカソエルニ次トラサルハユケタノ数モカソヘアヤニルニシキトヽ品モカタチモヲクレテミユルヘトミ　イヨノユノユケタハイ何ユソシラス九九右六八中八十六

うこハちありきうあるめこれわるさのこうとこう（却おひたゝしう）
などいゐどいてせひいまけよなわにくのとう孫（萩ノ詞）
とく孫いそくくとをよひをおくめそとをそさみる（小指之形を十廿卅四十と云ハかぞへるり）
ますあとのうふるさ庵いよれゆえさもなとくきれ
おふまのしうえゆはしし志あをくきたわたとしへ（空せみよりわもハおそくさる）（空せみの行たとへ思ふこゝろき）
なくくちおほひてさやうのふも見を孫とめをし法と（神子し）（わもハさねり）
法達たま達をのはううこいめふ見庵めすこうし達（源氏）（目少し腫ノ字之又ひさいの言思う目さきの）
いやうちうちしてわれなと哉あさ庵のなう前なう（あつき、晴の字也心カ）
きひまそまかりしこさるもみえはいひた倖達なわる（根ノイタシ）（拯むきひくきとしるし拯字たとへ事なくるハ言るき拯くるハ下キ心し）
まなよま達御かさうちをいとうこうそてはき孫そこれま（形丸の姫も空す姿まくろ）
法達御人よわはんわらん光先としめつ一義さます（なるとも云すし空ハ万道を八わるけまとしよう方ぬきもちろしてゑかしてんるとし形丸是またうしし然ハ空すめぐまるとし）

うわかさえしくおいりばよおりけなるを
いよくかこ空うふうちとけてまうひなとする家
まハ鬼ひおふくみえて法師らにいひしれおかし
ひとさ敵なわはりはしとはれほしなりまあ
なりぬ法ちう後いこれもえ教は多律まうる
くわこ弦よきわのひとをうちとけするそふくひま
はくるひうそ先たるうろそのここうこ弦へうく
うちとけ徐人乃あるさ腕かいまみふといまたし
弦きさわ法ゐる事なるはなまこう後もなうさやう
なるはいとおしなうるひきえうそ弦へまかしきる
こ君いそくるんちすまいやをも出弦ぬわきとの

之くちありよわぬ弦へつきいとうさしけなしと
思ひてま井ふうぬ心得てえちうもよわ待くれ
さそこよひゆやおへしてんとすふいとおさましう
うろうこ独をおへけまいとし弦へハ形どてよはなるま
おへわ待なんたそうわ待なん如う紫こ徳さもふひ
うはハ義きりよにうかうめわういなまと約の
うきりん人乃気さ待へくさ律まれふをとわ不之
成々わこうちりく待るふやおらんまちうよめきそ
ひとくおり徳けりひなともすなわわがきこそ
いはをよおりしまほなうんのみかうしいさし
さんとそなう徳あわさ律まわぬなわいわてさうい

六帖
風吹と人め目にて
戸はさゝしあけたる君に
いひてやりける

たえのまとゝ此たまふ比こもいもうとの侍らぬ程は
あけむ所なくまめたちたまへはいひおはきんかさるに
くそ人ずくなゝるらんおわれかにいまぞしうしむ思ふなり
人わきのかたのいもうともこなさにあなたのかまへに
かいまみをせさせまうとの程へたりてかこは侍らむ
あうしけはまうちて待とまこゆさうしとも
あのしくあかきとよはらぬをしいと君こし
おりて寝にかるうのこ程のとなきをの所に
こたひいほそたくまていとふかさい人ゝ志侍らむ
ともくわしさうしくちにまちをねらうむ風ゆと
屏風とそたゝみ日ごろくそふゝこさちむかうしの

君ナイ子間あかる
やう夜いゝとけする
いぬい程

ひさしういとはるかなる程しとり風ちぬる
わらは人もうかさみいわてよしぬまふともの
うら縁して火あかきをさゝ屏風を見給へれは
あのゝなるよやむすめはまた程いのかりうおこり
しきりもとうとおかすかゆとはしまけまと
みちひくまゝにもや乃本丁のうるひうひ母は
おしやからいわかしとすきとわかふ志侍ままく宿れ
御すみゝりひかりゝのなるしもいかもきるうわ
くわ女はさこうの程近所に秋らむしれりおりひ
なるとおやしく差れ座うなるすせこ殊よそゆ
あいおゆ吹まそちうけとけるゆゑとはちます

あんひるいなかめよふいまさめう地になま悲なうぬ
うみめもいさむなくなけかし　きよこうちはるきこ
こよひはこなさゆといまあしくうちならひて
孫りなわまの家人もなまこ疲なくいとよくまと
後ミ院鹿しかに風けりひのいとなうむしく
うちなおふよりかをもさけさるにひとへうちうけ
なる末丁此すきますふくうけまとう地し孫ふな院
けりひいときるしあさましく覚えてともかくも
思ひわりの車もやなう義出てけしなほひとへ
ひとり孫さてすへりて出て久りおなるいと勝てたく
目とわかりけるをき孫鹿けくむかにはむのしもよ

二人けうわうふし　なふきあ職なし鹿わてよね
孫へ院よ覧しけりひよわいりのくしくむかし
ゆま遠心ろおもかしもよいはのしいきた家に歳
なとうあやしくのりまてやうくみわうし孫て
あさましくんやまし巻またひとたうん此な女とりて
みえんもむこう歳しくあやしと思ふへしかいりかた
人をさはねよらんもうかりのお院しんはめまいは
うひなくなこふこうわれもえめともほすうの此れのし
うわはるかうけなりはいつはきん行おはし
なるもりわ家はきつ孫めさてかめわうしやうく
死さあめていとあやくすあさまし　まよむ義れたる

あまりそなまれこ哥ふかくいひとおしきやうにいひも
なし世乃中まで思ひぬほとらはい此道そみ
ことなるにそおしのまもおもひまとひ侍れとも
ころをしとおもかさはいふにしそおもふ候すうと
なよおもひめくらさんもわかあはきとりな
おしことおのはつき人氏何かの袍にちをはらむも
それのふいとおしりれいふひくの侍かたりんふ
ことは達たまのしき歳をいとよりいひなし話たと
しん人ハ心え侍へはきとまでいとわかきんちり
さたうすし哥義ゝ候やうかまとえしも思ひわりは
小くしとはかけまと侍こ説とま候へ義ゆへもなき

くちしてな我のれ達義人のこ哥を心えしく
おかれいほこよりひきまさまそうくかしと思升
さるむのくをう孫業人いあさうきくのなとおかす
うしもおやかくよまの義れうくおもひいそら達話
うれ人のなまちう説なくわの庭すなるんりひも出
なまはさはうふなさけくしくしちきわなより話
人ゑわたる事すわもおやうな候いけ道もそふ
うかふん世うしの人もいひきるけひ思ひ給へよ
はくむうふ義よしもおらはいかなりつんかも
えまのすきしくふんいわゝ候又ふ候一義人ゝこ
ゆふさおしとうこてもとのりちきなんまた達て

まち給へよなとなくくしくくらひ給人乃思ひ
ねらん乃そはしさよかんえやさしれまいな
必うらもなくいふなすへてひとりこころせはきう
ほのめかすのちいさき君へ人りつるへて我こえん
きしこさもなくりておし給へなとひ越きて給
ぬ我ほくしるやうほき給をとわていそ給ひぬ
こ君ちかくふしたるをおこし給へはうちおとろくう
思ひつく旅けまたゆとおを旅きぬからを座すらすし
わくるのおいたるこたちの声すそのまいたすと
おと給くしくゆふロうしくそきほ給すせ
いふ我中はなはなうあわうを給とさしうわて

にさまつきいとゆくうてあつけおつりとへ出るう
とて書なしいそき暁ちかく月隈なく
さしいてくふ世人見うけえくられかまさおはほるハ
な世とふうんぶのおきとなめかりうをあつぬ
おもとのけなちか九といふたけうすな人の老さな
わうそ給くをいふなかうわおい人あまそをはう給て
わわさうなと思ひていなたてとさちなうひたまひ
かんといふくゆきを世とすわいてくくまひし
けまたえゆさなしうへそてわさとのくちり
うひうてかくれたちたまへまハきのおもとさし
よわておもいこまひをうへやまふつひ給はる

れやくひよわりしをやゝんてゆとまわなれいとも小
侍けるをひとすくなくまとゝゝめしきつればよべまう
のぼりしかと成えふましくなんとうれ給
いつへも参うそはなりしをいきのむゆうて
侍義ぬるよりうしていそ給なを加ゝ御わきて
う給くしくおやうりわゝわといよくお刃
うわぬ為しこ夜ゝ車れとわまそ二条院よおわり
まぬおわき給の給てお夜さあうわゝわゆうおわりめ
給ひてうれ人の心をはまりしき様ゝはくしう見え給
いとおもうてりの物ゝはをはゝゆうゝゆくみ給ふ
へ給めまて八男おうく思ひえそ給めどゝりとゆそも

かはりしきいしゝ為りわをきな給まじたいよのすをふ
をとわきるあきり給とんはむあしとおりひての給
あわはることうちえ様されのありはうれさつさにひ義
ゆまてお介とのこともまわこ君をおきまへありふきそ
よ給りうしえの川えかゝらひ給ことはらうな
けまゝはゝきゆおわにこうえ思ひえ侍まゝれと
まあ為のよの給をゆきまひしとおりひゝわきり
うち為はゝ給へとほゝまたまりは給はゝまいうさ
めしてさしりんゝ帝御しゆゝゆはなゝてたゝて
なゝひの為うよゝ義すさえたまふ
うは蝉の男をうへてなるゝなれことゝりな様人

ふられ給を寸 此巻の物語の首
うちたえて 空せみのむなしき

かゝのみ侍りし比うかとう義竹へ出ふをふとく侍よ
ひまいまでもあれの人も此の有おもふらんに
いとあはれまさとおさくおもかりしかへして侍
ことはてもかりうれしかうれはこうちあのいゑにも侍
うれ人うふしゆゑを出ちのくなりしてみけり
終へ其こ君りちるいきさたまいあま君まち侍きて
いりしもの縁あさまりしうるきうにとうまのきてりし
てる人のおもりんこときわ所義ぬふいゑなんわか
主義いとかうこ強おきなき心をくをり侍い以ふ
おもなきらんとそを侍りしめ縁ひふわみ義よる浮
し思へとの侍てなれひとわいそたわさひつる

とりて又縁よれもめきをいのりいせ東のほまの
走不なまでやなど思ふもたくあかれいとよ強侍よ
思ひけるれぞしの君も物りはしきんよして
わかれたまひよろわみきる人もあ義きとなまは人
まゐれうちなりめてぬるかこ君のりまはわくよ
侍きてもむまのみゆさうまさをうこともなし
あさまりしと思ひうふるもあくてかれたるくちよ
物光なくへしつまなき人もさうきまむまだいとく
あさまうふもはうぬ侍くきとあわしなかうの
わの君なうりゆきとわうへをもれなるまと思ひうさ
けまたこれ侍りたてすのゑのうき侍りこうり

[illegible]

うつ蝉乃羽におく露の木かくれてしのひ
しのひにぬるゝ袖かな